恵那市における景観まちづくりの実践の歩みとそこからの学び

佐々木　葉[1]・岡田　智秀[2]・山口 敬太[3]・出村　嘉史[4]

[1]正会員　博士（工学）早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp）
[2]正会員　博士（工学）日本大学理工学部まちづくり工学科
（〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14, E-mail: okada.tomohide@nihon-u.ac.jp）
[3]正会員　博士（工学）京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻
(〒615-8540　京都市西京区京都大学桂C-1, E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp)
[4]正会員　博士（工学）岐阜大学工学部社会基盤工学科
（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1-1, E-mail: demu@gifu-u.ac.jp）

景観法制定後10年以上が経過し，景観計画の策定およびそれを機とした景観まちづくりが各地で展開している．本稿では岐阜県恵那市において著者らが実践してきた約10年弱の連鎖的な活動の継続としての景観まちづくりの歩みを振り返った．その結果，目指された景観像は地域の生活に根ざした身近な景観であったこと，実践の手法においては大字という単位空間に着目し，単位ごとの議論内容を相互に確認する手法が効果的であること，また地域コミュニティの構造および行政施策上に景観まちづくりをどのように位置付けるかが，今後重要であることが考察された．

キーワード:景観まちづくり,景観法,景観計画,恵那市,

１．実践の振り返りと学び

景観法制定10年の節目も過ぎ，後述するいくつかのレビューも行われ，景観法後のまちづくりの実践も蓄積されてきた．景観行政団体への移行も継続し，あるいはまた初期に策定された景観計画を見直す例もある．同時代的に景観法の制定以降の歩みを見，また実践の一翼を担ってきた者の一人として，折に触れて来し方を振り返ることは必要である．現在進行形の活動から立ち上る問題意識はその都度異なり，その異なる意識から振り返る過去は，また異なって見える．

著者らは，2008年から岐阜県恵那市の景観計画策定を機とした景観まちづくりに関わってきた．その道筋はあらかじめ想定していたものではなく，文字通り走りながら考えてきた結果である．本稿ではその歩みの概略を振り返り，近年のレヴューの視点も踏まえながら，恵那市における実践からの学びを考える．

２．景観法制定以降の景観施策へのレヴュー

景観法制定10年を節目に，幾つかのレビューが行なわれている．ここでは主な文献などにみられる論点を確認する．

a)「景観再考」

2013年8月に建築学会編として出版されたこの本[1)]は，サブタイトルに「景観からのゆたかな人間環境づくり宣言」とあり，またカバーの帯には「『景観』を私たちの手にとりもどそう」と記されている．景観法制定後，景観行政は実質的に届け出対象行為に対する景観形成基準の適合性の議論に縛られ，景観の概念が矮小化されたことを批判している．具体的には，景観を表面的なものととらえる，制度に縛られ計画実現が自己目的化する，担当課任せとなって横断的でなくなる，という指摘である．それに対して景観を，人間環境の豊かさという総合的な環境施策やまちづくり行為をアイデンティファイする概念として位置付けようとしている．「再帰的過程，すなわちそれまで自明としてきたものにも理性の光をあて得られた知見を再度社会に還元しようとする過程を通じて，「景観」は地域づくりの漸進的取り組みを支えていく」（p. 11）との指摘が注目される．

b)都市計画学会誌特集「景観法10年」

2014年6月に発刊されたこの特集[2]には，景観法の実績と検証，景観計画運用の最前線，景観計画の国際展開についてそれぞれ４編，計12編の論文が掲載され，学術研究論文の動向もレビューされている．舟引論文[3]では，法律上保護するに値するものとして景観利益を示すこと，また保全の措置が難しかった資産価値を顕在化するための根拠としての景観法の意味が示されている．小浦論文[4]では，景観法制定のタイミングが「景観と地域がつながりはじめたとき」であるとした上で，地域環境の総合的計画管理，開発マネジメントとガバナンスとしての景観計画のポテンシャルに注目している．佐々木論文[5]では，景観法制定後の社会の変化との関係を指摘し，特に平成の大合併との関係の上で，地域の相互補完的な戦略としての景観計画の活用可能性を指摘している．田中論文[6]では，世界規模での都市間競争という環境下において，デザインレビューの徹底による都市デザインの価値向上への期待が指摘され，一方宮脇論文[7]では，欧州風景条約を支える哲学，人権という観点からの位置付けに注目する必要性を指摘している．以上の論点は，あらためて何のために景観なのかを，現代の社会状況，課題認識に照らしたものと解釈できる．

c)「日本らしく美しい景観づくりに関する懇談会」

国土交通省都市局，住宅局，観光庁が事務局となって開催されたこの懇談会からは，2015年3月に論点のまとめ[8]が公表されている．ここでは，景観行政団体の増加，景観がよくなったという意向調査結果，交流人口増加などの個々の場所での成果などを持ってこれまでの実績としたうえで，今後にむけて４つのテーマを掲げている．それらは，テーマ１：都市を象徴する『風景』を形成するにはどうすればよいか，テーマ２：集約型都市構造の転換にあわせ景観施策をどう展開すべきか，テーマ３：まち並み景観を『生きた資源』として保全するにはどうすればよいか，テーマ４：富士山等の広域的景観資源の保全施策をどう展開すべきか，である．これらに対して，良好な景観形成を進める上での基本的考え方とする４つの論点，広域的観点からの都道府県の調整機能等，景観協議のあり方，景観を資産として捉えることによる地域景観価値の向上，法制定以降に顕在化してきた景観課題への対応が，それぞれどう関わるかマトリクスで示されている．ここでのテーマは，国が進める施策に紐付いたものと解釈できる．

以上に概観した景観施策に関するレビュー論考には，大きくは景観の価値の捉え方と，推進における着眼点やスタンスの２種類の論点を見ることができる．

３．恵那市における景観まちづくりの実践

(1) 恵那市の概要

岐阜県恵那市は岐阜県の南東部に位置し，JR中央線恵那駅は名古屋駅から約１時間の距離にあり，人口は51,866人（2016年8月現在：恵那市ウエブサイトより）である．東西に中山道という歴史的交通動線が通り，これに並列して国道19号線，JR中央線，中央高速自動車道が通る．さらにリニア中央新幹線が計画されており，隣接する中津川市坂本に駅および車両基地が建設予定である．こうした東西の国土交通動線上にある恵那駅から南に明知鉄道が伸びている．2004(H16)年10月，旧恵那市と恵那郡の5つの町村（岩村町，山岡町，明智町，串原村，上矢作町）が新設合併し，その際に，地方自治法にもとづく地域自治区制度を導入している．2008年から景観計画の策定に取り組み，2012年３月に景観計画を取りまとめている．景観法制定以前には，景観に関する自主条例等は策定していない．

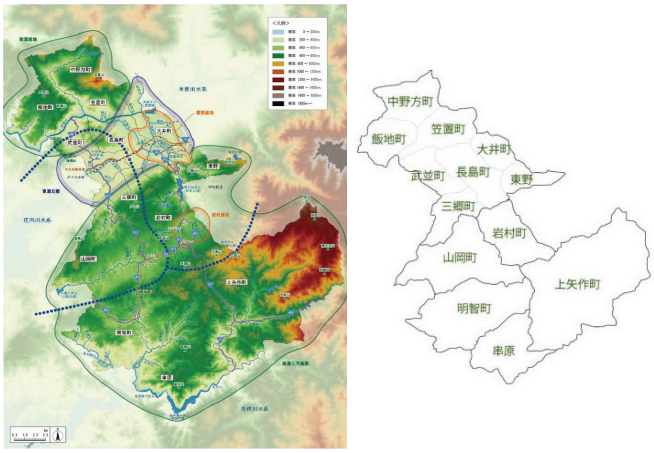


図-１　恵那市の空間構造[40]と地域自治区

(2) 景観まちづくりの概要

著者らが関わってきた景観まちづくりについて，その概略を**表―１**にまとめた．また，恵那市をフィールドとして著者らが外部発表した論文等31編を参考文献に示し[9)-39)]，**表―１**中の個々の活動などについて対応する文献を表中に示した．以降には，景観まちづくりの特徴的な事項について述べる．

a) スタート時点での問題意識

景観法の制定，合併をうけて，恵那市として景観計画の策定を決定した際に，市担当者が佐々木に関与の依頼をしたことがすべての始まりとなる．恵那市内には，坂折の棚田，恵那峡，岩村城下伝建地区，富田の農村景観日本一，明智日本大正村といった，わかりやすい景観資源があったため，これらの保全や活用といった計画を市担当者は漠然とイメージしていた．しかし現地確認後，こうした点在する景観資源を支える地域の暮らしの問題，またそれ以外の圧倒的な面積を占める普通の田園風景や

ローカル鉄道の魅力とその存続の不安，恵那駅周辺の中心市街地の空洞化といった地域の課題こそが景観計画を通して取り組むべき事項であることが直観された．そのため，こうした問題意識のもとでの景観計画の議論を，方法論はまったく未定であるが，恵那市においてチャレンジしていくことを提案し，市担当者の同意を得た．スタート時点での地域の持続性と景観の維持を表裏一体のものとして取り組むという基本スタンスが，その後の景観の多面的展開を必然的に誘引したと考えられる．

b) 地域別の議論

合併によって一つの市となったが，市域には３つの水系があるように地形的にもそれぞれ特徴，まとまりのある地域から構成されている．また，地域自治区制度の導入にも見られるように行政は地域の自立性を重視していた．そのため景観計画では全体の計画を検討する以前に，まず地域別の議論を行うこととした．特に恵南とよばれる合併によって恵那市域に編入されたそれぞれ独立性と特徴のある岩村，山岡，明智を対象とし，さらに岩村は田園地域の富田と城下町の城下とを区分し，４地域でのワークショップ(以下WS)を著者らの４大学が担当して同時並行で開催した[10)-13)]．この手法は，以降の他自治区に継承されている．なお，この初期の実践において，平成21年度国土交通省地域景観づくり緊急支援事業に「合併後の地域連携を活かした持続可能な景観づくり計画と実行プロジェクト」として応募し，採択されたことは活動資金の面でも非常に幸運であった[注1)]．

表−１　恵那市における景観まちづくりの実践の歩み

年	月	景観計画	地域別景観まちづくりWS	デザイン検討	イベント的活動	調査・研究	恵那市の事業等	備考
H20 2008	5	景観計画策定プレワーキングチーム会議						市役所内の関係7課の職員と有識者2名
	6	恵那市景観計画策定委員会スタート						委員15名関係団体・公募・有識者
H21 2009	2	恵那市景観講演会				土木計画学研究委員会メンバーによる集中議論		2日間　日大・京大・早大・熊本大・PN+プレWGチーム
	6						国交省地域景観づくり緊急支援事業申請	
	10		4地域（富田・岩村・山岡・明智）WS 2010.3までに計4回[10)-13)]					
	11				明知鉄道の風景を考えるWS			主催：市＋土木学会（交通計画系メンバー）
				明知鉄道駅前広場デザイン検討開始				担当：設計領域
H22 2010	1				明知鉄道の駅を考えるWS			主催：市＋土木学会　基調講演篠原修
	3		地域絵図作成[15)]	明知鉄道駅と駅前広場デザイン提案[14)]				担当：設計領域
	5		4地域合同報告会					広域交流
	6				富田茅の宿オープン[19)]			
	8				グラウンドワークOJT			5日間富田と明智鉄道にて学生プログラム総務省補助
	8				カカシ作りスタート			以降毎年開催
	8					茅の宿にて岐阜大ゼミ合宿		
							社会資本整備総合交付金事業（地区ごと）	
				恵那駅前広場改修完成				
	10					明智町町並現況調査[18)]		
	11		明智の町並みづくりWS 2011.5までに計3回[18)22)]					
H23 2011	1			恵那駅前広場木製シェルター完成				土木学会デザイン賞奨励賞受賞
	5		（仮）明智町に住み続けられる’モデル町屋’改修検討WG					候補対象見つからず実現せず
	8				カカシを明知鉄道無人駅に設置[17)]			
	9					明智にて早大授業科目フィールド調査		「地域のサステイナビリティと風景デザイン」
				明智浪漫亭前広場・明智駅前広場改修工事完成				
	12			明知駅にカフェ「まろにえ」オープン				
H24 2012	3	恵那市景観計画発効						
	7	恵那市景観審議会スタート						
	8					大井町町並・水路現況調査		
	8					茅の宿にて日大ゼミ合宿		以降毎年開催
	11					明智川改修デザインのための調査		
	11		大井町町並み水路調査結果報告会		あけてつ沿線フォトコンテスト			
H25 2013	1		大井町のこれからのまちづくりを考えるWS 2013.3までに計2回					
							岩村伝建地区電線地中化完了	
	3					明智千住用水現況調査		
	5				農村景観日本一の棚田の持続可能社会づくりプロジェクト			岐阜県：若い力で元気創出ふるさと支援事業3ヶ年
	5					明智まちめぐりマップ作成		
	6		大井町WS 2013.11までに「歴まち地区」計4回[31)]「土々根・岡瀬沢地区」3回[26)27)32)33)]					
	7			明智川改修デザイン提案[34)]				
					「明知鉄道かかしコンテスト」が明知鉄道主催でスタート			以降毎年開催
	12				トラクター電飾パレード（富田地区）			以降毎年開催
H26 2014	1					土木学会ワンデーセミナー		
	3		武並・三郷地域景観まちづくり講演会					基調講演中村良夫
	6			明智川改修工事完了		武並・三郷地域景観現況調査		
	10		武並・三郷地域全体WS2014.12までに計2回					
	10		武並・三郷地域地区別WS（藤・竹折・椋実・佐々良木・野井）2014.11までに計2回					
H27 2015	6		武並・三郷地域フォローアップWS					
	7			大井町上宿ポケットパークデザイン監修開始				
H28 2016	4	屋外広告物条例施行		大井町上宿ポケットパーク完成				
	4				恵那市の可知孝司さんを囲む会			景観まちづくりの歩みを振り返る会

c)空間・施設デザインへの展開

景観計画の地域別の議論と同時並行で，市内の幾つかの具体的な場所のデザイン，施設整備に関与することとなった．それは，景観計画の担当は建設課であり，同じ部署内で進む事業であった恵那駅前広場のバリアフリー改修に対して舗装の色などのちょっとした助言を求められたことから始まる．すでに実施設計が終了していたが，ちょっとした助言の範囲を超えて実施可能な範囲の最大限の変更の提案を早稲田大学がおこなった．このプロセスにおいて，公共施設のデザインの重要性が担当課にも認識され，他のケースにおいてもアドバイスをしていくこととなる．具体のデザインについて大学で対応できない実施設計レベルでの提案はデザイナーを紹介し，恵那駅前広場木製バスシェルター（2013年土木学会デザイン賞奨励賞），明知鉄道明智駅前広場および交流施設[14]，明智浪漫亭前広場改修などが実現した．基本構想のみを提案し，その後の設計施工は地元業者が担当する例もあり，デザインとしての完成度にはバラツキもある．明智川の近自然化改修では，設計および現場指導に近自然化工事に経験のある土木技術者の協力を得た[34]．

d)イベント的活動

表－１において，イベント的活動としてあげたものには２種類ある．一つは景観まちづくりとして重要な対象に対して公的な位置付けをもっておこなわれた議論や活動であり，いま一つは多様な主体が関係する自主的，個人的な活動である．前者については，まず2009年度の明知鉄道に関する２回のＷＳがあり，これは前述した国交相の補助事業を得て，地域別に議論を進めている４つの地域をつないで走るローカル鉄道の価値を議論した[9]．

また岩村富田地域の空家化していた茅葺屋根の家が地域の人々の努力で市の補助をて宿泊施設として改修され，2010年6月にオープンした．この施設は，後者の自主的，個人的な活動の拠点となり，以降の展開，継続に大きく貢献した．具体的には恵那市以外の資金を活用して学生が参加する活動（グラウンド・ワークOJT，農村景観日本一の棚田の持続可能社会づくりプロジェクト），およびIターン者であるデザイナーの指導によって日本大学学生が継続して行ってきたカカシづくりの活動が，茅の宿を拠点施設として行われていく．制作したカカシを明知鉄道の無人駅に設置し，その写真コンテストを行うことで車窓景観への興味を高めることを意図した著者らの自主的活動は，その後，明知鉄道が自ら主催するイベントへと展開した．

e)調査・研究

景観計画の策定には，当然のことながら対象地の様々な調査が必要となる．**表－１**には地域外の専門家と学生による，主に現状の悉皆的調査，新たな観点やアイデアを生み出すためのブレーンストーミング調査を示した．こうした業務の域を超えた調査のなかから，当初想定していなかった論点，WSの形，活動の方向性が生まれるとともに，特に悉皆的調査は地域住民への地域の見方への刺激となって，地域の景観まちづくりの目的の議論が深化することを促した．その他表には示していない著者らの研究室の学生の卒業研究，修士研究が数多く行われており，それらは間接的に景観まちづくりの理念を支える知となるとともに，調査協力を得る過程で地域住民および市職員との交流，信頼関係の醸成に資するものとなる．

f)景観計画本体の議論

表－１の左端に記した景観計画本体は，市によって設置された策定委員会で議論をかさねて進められた．関係団体，公募，有識者からなる委員15名，青山貫禅委員長（恵那市商工会議所副会頭）のもとで，a)で述べた景観計画の意義とコンセプトを共有し，優れた事務局体制（市建設課および関連課と（株）プランニング・ネットワーク）のもとで建設的に議論が進んだ．恵那市の目指す景観像を「山，農地，里，まちのつながりを大切にし，そこでの人々の暮らしが見える風景」としている．他の景観行政団体のものと比較した特徴としては，地域自治区単位での広義の景観の特徴の尊重，届け出対象基準に色彩を加えている（鮮やかな色を使うものは面積が小さくても届け出対象とする）ことなどがある．景観計画策定後は，景観審議会（委員長佐々木葉）が年に２回程度開催され，公共施設（市立病院）の計画における景観配慮，屋外広告物条例の策定，景観重要建造物および樹木の具体的な指定などについて議論が行なわれている．

⑶景観まちづくりの構造

以上のように，恵那市においては，狭義の景観計画検討を大きく超えた範囲の活動が，景観の冠のもとに展開された．**表−１**に示した事項以外にもこれらの出来事から派生した各種の活動がある．また当然のことながら，表中に示した事項はすでに存在していた活動，組織の協力によって推進されている．連鎖的な活動の継続として景観まちづくりの構造を理解することができる．

一方，狭義の景観計画の行政的運用としては，届け出対象行為の景観形成基準適合確認がやはり機械的に進んでいる．景観形成基準の中でも数値基準によって機械的に判断できる色彩，高さのチェックのみが行われているのが実態である．また近年は太陽光発電パネルの設置のための開発行為が届け出られるが，実質的には景観的配慮を要請することができていない．

４．恵那市の景観まちづくりからの学び

約10年弱におよぶ恵那市における景観まちづくりの実践を自ら振り返り，そこから学んだことを以下に述べる．2章で概観した近年のレビューにみられた論点の大別，すなわち，景観の価値の捉えかたおよび推進における着眼点やスタンスに沿ってまとめる．

⑴景観の価値の捉えかた

詳細な分析は今後に譲るとして，これまでに行われてきた11地区でのWSの議論によって浮かび上がってきた景観の価値は，いずれも地域の暮らしから育まれてきた当たり前の景観を再確認するものであったと言える（**表−２**）．それは，こうした当たり前の景観の劣化や持続への危機感の裏返しでもある．地域の課題（人口減少，伝統的建物の損傷や取り壊し，営農継続者の減少，まつりやコミュニティ活動の減退など）に対して，もともとそこに営まれていた暮らしの価値を再認識し，その魅力を糧にした地域再生を図る手段として，地域に根ざした景観を目標像としようとするものである．またそのために，当たり前の景観を磨き，発信することが重要と認識されている．生活景や文化的景観としての捉えかたに類する．

一部の地区では，観光名所の開発によって人を呼び込むことへの希望が強く語られることもあった．つまり明智町における「日本大正村」の再生，武並竹折地区でのリニア中央新幹線を意識した施設開発，歴まち重点地区の指定をうけた大井町歴まち地区における行在所の観光活用などである．しかしそうした主張をする住民からも，具体的なアクションプランや場所の再生の議論のレベルでは，子どもの頃行った川遊びの再生など，リアルな身体感覚を伴った提案がなされていった．

以上のような景観の価値の傾向は，WSの議論のなかで生まれてきたものではあるが，WSを企画した著者らの価値観の影響は排除できない．WSのプログラムとして準備するまちあるきのルート，議論に使うアイテムカードなどに，生活景的な要素をあらかじめ組み込んであったが故に，それに誘発された発言が生まれたとも考えられる．その点は自覚しておく必要がある．しかし少なくとも，電線や看板という表層的な見え，あるいは歴史や文化，自然といった抽象的なレベルに議論が終始することはなかった．

さらに，一連のまちづくり活動を通じて，居場所という言葉が，一つのキーワードとして行政担当者のなかに刻まれた．直接的には明知鉄道の駅を考えるWSにおける篠原修の基調講演で示され，その後大井町歴まち地区でのWSでも核施設や公共空間，さらにはまちが多様なひとの居場所となるという議論が繰り返された．これはその後の市の施策においても意識されることとなった．

表−２　地域別景観まちづくりWSで得られた景観の目標像

WS実施地区	WSでまとめられたまちづくりの目標を表すフレーズ
明智	もう一度、磨き上げよう、ロマンのまち
山岡	ホラ（洞）！みんなでつなごう山岡景・誇り守ろう！天然産村やまおか
岩村城下	水みちと小みちが織り成す城下の風景へ・歩けばわかる岩村のまちを次世代へ・岩村の日常岩村らしさを大切に
富田	手をいれてつなごう農の風景・みんなでつくる農村生活日本一・里山棚田水源が一体となった自然のまち富田・農業と観光のバランスのとれた農村
大井町歴まち地区	「交流・定住人口をふやすこと」を最終目標にこのまちならではの資源を生かした、まち・コミュニティの再生にとりくむ
大井町土々根・岡瀬沢地区	ふるさとが香るまち・子供達が遊べる田園空間を残した歴史あるまちづくり
武並藤地区	権現山の鬼も喜ぶ多彩な作物・おふくろの味
武並竹折地区	武並三郷の玄関口として品格ともてなしのあるまち
三郷佐々良木地区	コンパクトな農力・歴史的用水・眺望を活かした天空集落
三郷野井地区	農のリズムによりそう「野井くらし」のすすめ
三郷椋実地区	清流の郷・野の花ミュージアム

⑵景観まちづくりの推進上の学び

次に，具体的に何をどのように進めていくか，について，経験的に学んだこと，および今後の検討が必要な点について順不同に列記する．

a)大字という単位空間

景観まちづくりは多様なモードで展開するが，やはり空間計画の一つであり，即地的に議論される．そのため計画単位，議論の単位として，どの範囲を設定するかは重要である．恵那市においては合併前の町村を基礎とした地域自治区がまず明確な単位として存在した．しかし地域自治区単位では自らの生活の場の景観を議論するには大きすぎ，また特徴が大きく異なる地区が含まれる．そのため，現地調査にもとづく検討から，大字を単位空間として議論および計画を組み立てることを実践してきた．地形や水系のまとまりとそれに根ざしたコミュニティの単位空間であることが多い大字は，景観まちづくりにおいて，特に田園地域や歴史的集落に根ざす場合，有効な単位空間と考えられる．

b)相互確認と同時並行

恵那市においてはまず，４地域で４回のWSを４大学が分担して同時並行で進めた．基本的プログラムは共通とした．この進め方は，相互の比較対照を可能とし，それによる他地域への関心，自らの地域の客観的理解を促すことに大きな効果を発揮した．また山岡においては，旧山岡町が一つの地域自治区となっているが，WSによって議論するには広域にすぎた．そのためa)で述べた大字単位のブロック（旧山岡町を構成していたそれ以前の町村単位）によって東と西に区分し，WSのプログラムのなかで相互訪問・紹介という方法を導入した[10]．これによって居住地以外への関心と居住地を他者の目で見ると

いう体験が可能となり，あらたな景観認識が醸成された[11]．

武並・三郷地域では，初回と第４回を合同で，その間の２回は大字単位で議論を進めた．さらに第４回の合同議論では，各地区のまちづくり提案をワールドカフェ方式で回り議論するというプログラムを導入した．これによって，市のなかでは西部地域として大きく括られる地域に対して構成単位ごとの相違と共通点が顕在化し，身近な地区への意識と隣接地区への意識が相互確認された．以上のような，適切な単位ごとの議論とその相互確認を可能とするプログラムは，交流や連携を具体化するためにも有効な方法であると考えられる．

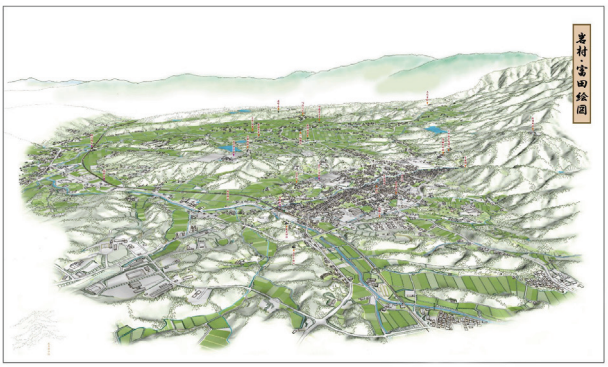
c)一目でわかる成果物

WSとは重層的なコミュニケーションの場であり，その結果の記録は極めて難しい．付箋紙に書かれたワードや感想などを毎回の記録としてのニューズレターにまとめていった．議論の成果を記録する場合，ひとつひとつの情報を丁寧に記録すれば必ずしも整理しきれないまま情報量が多くなり，一方多様な発言をまとめてしまうと，歴史を大切に，というような一般論的，抽象的な表現になってしまう．ライブ感あふれるWSの成果，何が合意，創造されたのかを端的にまとめる記録の作成は容易ではない．恵那市においては，地域の景観構造や場の景観を描き込んだ地域絵図の作成を試みた（**図−２**）[15]．絵図作成段階における議論は，地域住民の認識の特徴把握につながったものの，作成した絵図の利活用はまだ十分できていない．

一方大井町歴まち地区では，WSの結果，目指したいまちの景観像をイラストによって表現した（**図−３**）[31]．居場所のイメージや，そこでの人々の行為のイメージを表現することで，言葉や写真では伝えづらい目標像を一目でわかるよう伝えることが可能と考えらえる．しかし，これにはかなりの労力を有する．

d)地域のコミュニティ構造と行政施策体系における位置付け

以上はいずれも景観計画の議論の進め方における手法



図−２　WS での議論を元に作成した岩村・富田絵図

といえる．それに対して，景観まちづくりの進展と成果を，運や偶然に委ねるのではなく，戦略的に推進していくためにあらかじめ意識しておくべき事項があると考えている．それは，まずは議論や活動を実践する主体，グループの地域のコミュニティ構造上の位置付けであり，次いで景観計画や景観まちづくり施策の行政施策体系上の位置付けである．恵那市においては，地域自治区制度に基づいて様々な組織の再編，創設が行われた[41]．また既存の自治組織も存在する[20][21]．こうしたコミュニティ構造に対してWSに参加している人々，グループがどのような関係にあるのか，またコミュニティ構造を参照してどのようなグループに働きかければよいのか．こうした視点を恵那の実践において著者らは持っていなかった．

景観という冠のもとで新たなコミュニティや連携が誕生することを目指すためにも，参加者を帰属組織という属性で捉えずニュートラルで独立した個人の集団とみなすことは必要である．その一方で，既存のコミュニティ構造をふまえた戦略的働きかけも今後検討が必要と考える．

さらには，景観計画および景観まちづくり施策が，行政施策のなかにおいてどのように位置付けられるかは，その実効性と展開に大きく関わってくる．恵那市では景観計画は総合計画をヴィジュアル化したもの，という考え方を当初から意識していた．また**表−１**にも示したよ

図−３　大井歴まち地区 WS の成果をまとめたリーフレット（４ページ中の１ページ）

うに公共施設の整備の展開など，他の施策のもとに位置付けられている事業や補助金の活用などが，市職員の采配によって連携して行われきた．こうしたキーパーソンによる展開や運用ももちろん必要であるが，組織的な対応が担保されるよう，景観まちづくり施策の位置付けを工夫する必要がある．

景観計画は土地利用計画でもあるが，景観法制定以前に存在していた土地利用に関わる制度，ゾーニングとの棲み分けが制度上行われているため，景観計画の意図を汲んだ既存の他の法定計画のゾーニングの再編も必要となる．しかし農地転用など異なる枠組みで規定されている土地利用との対応は通常行われにくい[注2]．

以上に言及した地域コミュニティおよび行政施策にどのように景観まちづくりを位置付けていくかは，ローカル・ガバナンスの文脈から景観まちづくりを捉えることにつながると考えられる[42]．

５．おわりに

本稿では，著者らが実践してきた恵那市における景観まちづくりの歩みを概観し，そこからの学びを考えた．一方，こうした実践がどのような成果をもたらしたのかは別途検討しなければならない．その場合の評価軸および評価指標には，WSで議論された景観まちづくりを通して解決したい課題の改善の程度，また提案されたアクションプランの実現度，さらには景観まちづくりに関わる主体の広がりなどが考えられる．また，現状では景観計画本体の運用の形式化がみられ，これに対する対応を行政施策の構造的な観点から検討する必要がある．

本研究の一部はH28年度JSPS科研費15H04062(戦略的地域景観まちづくりの理論化と実践手法の開発 代表：佐々木葉)による．

補注

注1)国交省の本事業については，（株）プランニング・ネットワークの伊藤登代表の提案と応募申請書類の作成によって採択された．著者ら大学関係者だけでなく，当初からコンサルタントがパートナーとして参画していたため，恵那市の景観まちづくりの多面的展開が可能となった．なお大学関係者の実践活動資金は，地域別景観計画策定に関する研究業務を恵那市から大学に委託することでまかなわれるとともに，著者らの研究費によって行われた．

注2)こうした問題に対して，景観農業振興整備計画による対応が可能とも考えらえるが，景観農業振興整備計画を具体的に策定している例は極めて少ない．

参考文献

1) 「景観再考−景観からのゆたかな人間環境づくり宣言」，日本建築学会編，鹿島出版会，2013年
2) 「都市計画　特集：景観法10年」日本都市計画学会，Vol:63，No.3，2014年6月
3) 「景観法成立以降の景観行政の歩み」舟引敏明　文献2)，頁４−９
4) 「景観法が示すプランニングの可能性」小浦久子，文献2)，頁10-15
5) 「景観法がてらしだした社会と景観まちづくりの未来」佐々木葉，文献2)，頁22-27
6) 「景観法を活用したデザインレビューの課題と可能性-府中市と渋谷区での活用事例について−」田中友章，文献2)，頁28-33
7) 「欧州ランドスケープ条約から考える未来」宮脇勝，文献2)，頁60-63
8) 「論点まとめ」日本らしく美しい景観づくりに関する懇談会，国土交通省，2015年3月，http://www.mlit.go.jp/common/001084627.pdf
9) 「公共交流機関としての明知鉄道の可能性」出村嘉史，佐々木葉，岡田智秀，山口敬太，土木計画学研究・講演集 Vol：41，年：2010，頁：128_1-5
10) 「拠点分散地域における交流型景観まちづくりに関する考察-岐阜県恵那市山岡町における景観まちづくりワークショップの取り組みから-」川島正嵩，岡田智秀，朽木健二，島田かおり，大西慧，土木計画学研究・講演集 Vol：41，年：2010，頁：129_1-6
11) 「岐阜県恵那市山岡町地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果」，島田かおり，岡田智秀，横内憲久，朽木健二，川島正嵩,大西慧，土木計画学研究・講演集 Vol：41，年：2010，頁：136_1-6
12) 「岐阜県恵那市岩村城下地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果」，高村匡佑，出村嘉史，田中利明，清水勇介，土木計画学研究・講演集Vol：41，年：2010，頁:134（ポスター）
13) 「岐阜県恵那市岩村富田地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果」，山口敬太，出村嘉史，田中倫希，土木計画学研究・講演集Vol：41,年：2010，頁：135（ポスター）
14) 「地域と人をつなぐ明智鉄道駅と駅前広場のデザイン提案」，吉谷崇，新堀大祐，篠原修，土木計画学研究・講演集 Vol:41，年：2010，頁：137_1-5
15) 「地域景観認識の表現媒体としての絵図 −岐阜県恵那市での試みから-」，佐々木葉，長谷川智也，景観・デザイン研究講演集 Vol：6，年：2010，頁：238-244
16) 「ローカル鉄道のイメージを構成するコンテンツと表現に関する研究」，井下田渉，佐々木葉，景観・デザイン研究講演集 Vol：6，年：2010，頁：228-230
17) 「ローカル鉄道のある風景」，佐々木葉，CE建設業界 Vol.59 No.11，年：2010，日本土木工業協会
18) 「地域に積層する履歴の痕跡を活かした地方都市の景観まちづくりへの取り組み −岐阜県恵那市明智町を対象として-」，井下田渉，佐々木葉，土木計画学研究・講演集 Vol：43，年：2011，頁：93_1-5
19) 「農村地域における持続可能な景観まちづくりに関する研究 −岩村町富田地区の景観まちづくり過程を通じて-」，馬上和祥，横内憲久，岡田智秀，川島正嵩，土木計画学研究・講演集 Vol：43，年：2011，頁：90_1-5
20) 「持続可能なまちづくりを支える人々のネットワーク −

岐阜岩村を事例として-」，石田大貴，出村嘉史，高木朗義，倉内文孝，土木計画学研究・講演集 Vol：43 年：2011，頁：88_1-7
21) 「持続的なまちづくりを支える人々のネットワーク―岐阜県恵那市岩村町を事例として―」，石田大貴，出村嘉史，高木朗義，倉内文孝，平成22年度土木学会中部支部研究発表会講演概要集，　年：2011，　頁：427-428
22) 「地方都市における個別建物更新のメカニズムと景観まちづくり-個々の住民の暮らしの総体的方向性のマネジメントと町並の位置づけ-」，佐々木葉，井下田渉，土木計画学研究・講演集 Vol：45，年：2012，頁：65_1-5
23) 「風景の多元性に着目した地域認識に関する研究 -鉄道の車窓風景を対象とした写真投影法実験を用いて-」，藤澤奈緒，佐々木葉，景観・デザイン研究講演集 Vol：8，年：2012，頁：52 - 58
24) 「近代大井町観光業における「六間巾道路」の役割」，大井晴奈，出村嘉史，景観・デザイン研究講演集 Vol：8，年：2012,頁:132-135
25) 「恵那峡における電力開発と都市形成」，大井晴奈，出村嘉史，平成23年度土木学会中部支部研究発表会講演概要集,年：2012，頁：301-3022
26) 「岐阜県恵那市大井町地区の景観計画策定に向けた地域資源に関する考察」，井出純一，横内憲久，岡田智秀，押田佳子，土木計画学研究・講演集 Vol：47，年：2013，頁：105_1-4
27) 岐阜県恵那市大井町地区の景観計画策定に向けた地域資源に関する考察-中山道大井宿とその周辺地域を対象として-」，井出純一 ,横内憲久，岡田智秀，押田佳子，大塚宏樹，土木学会年次学術講演会講演概要集 Vol：68，年：2013，頁：IV-055
28) “Visualization of regional landscape and planning ― An interactive learning field for students and residents”，Yoh SASAKI，Tokohide OKADA，Landscape and Imagination，UNISCAPE，2013，pp. 681-686
29) “Personal Networks as a Foundation for Sustainable Neighborhoods: Two Types of Community in Iwamura”，Yoshifumi Demura，Hirotaka Ishida，Akiyoshi Takagi，and Fumitaka Kurauchi，Social Capital and Development Trends in Rural Areas - Volume 8，Center for Enterprenership and Spatial Economics，2013，pp.157-168
30) 「ヴィジョン・ドローイングとしての景観計画」，佐々木葉，岡田智秀，日本建築学会都市計画委員会-景観法10年の検証-市町村景観行政の課題と展望-，日本建築学会全国大会（北海道）都市計画部門研究懇談会資料，年：2013，頁：31-32
31) 歴史的蓄積を有する地方都市における地域景観まちづくりの取り組み -岐阜県恵那市大井町でのまちづくりワークショップを通じて-」，松田恵理子，佐々木葉，安永祥平，土木計画学研究・講演集 Vol：49，年：2014，頁：154_1-6
32) 「岐阜県恵那市大井町における生活領域と景観資源に関する研究 -土々ヶ根・岡瀬沢地区を対象として-」，井出純一，横内憲久，岡田智秀，土木計画学研究・講演集 Vol：49，年：2014，頁：153_1-5
33) 「岐阜県恵那市大井町における生活領域と認知点に関する考察 -土々ヶ根・岡瀬沢地区に着目して-」，井出純一，横内憲久，岡田智秀，土木学会年次学術講演会講演概要集 Vol：69，年：2014，頁：Ⅳ-033
34) 「地方都市小河川の部分的な近自然化デザイン-岐阜県恵那市明智川の場合-」，佐々木葉，景観・デザイン研究講演集 Vol：10，年：2014，頁：247-257
35) 「大井ダム建設後の大井町における遊覧施設の建設」，大井晴奈，出村嘉史，平成25年度土木学会中部支部研究発表会講演概要集年:2014，頁：IV-67
36) 「景観法がてらしだした社会と景観まちづくりの未来」，佐々木葉，都市計画，Vol:63，No.3，年：2014，頁:22-27
37) 農村景観保全のための「コンパクトファーム」構築に関する研究」，小泉雄大，横内憲久，岡田智秀，土木計画学研究・講演集 Vol：51，年：2015，頁：369_1-9
38) 「農村景観保全のための「コンパクトファーム」の提案と実現化方策に関する研究―現行法制度分析および行政ヒアリングを通じて―」，小泉雄大，横内憲久，岡田智秀，土木学会全国大会　第70回年次学術講演会，年：2015，頁：1-2
39) “Visualization of the Diversity of the Community Using Social Network Analysis in Iwamura and Yanagase”，Kazumasa Iwamoto，Hirotaka Ishida，and Yoshifumi Demura，Social Capital and Development Trends in Rural Areas Volume 10，Marginal Areas Research Group，2015，pp.47-56
40) 「恵那市景観計画」恵那市，年：2012年3月，http://www.city.ena.lg.jp/files/2213/8562/5379/keikankeikaku_zentai.pdf
41) 「再編後の住民自治組織に温存された既存組織の実態とその背後にある自治体行政の課題-岐阜県恵那市岩村地域のまちづくり実行組織を事例として」萩原和，星野敏，橋本禅，九鬼康彰，農林業問題研究，No.186，年:2012，頁：64-70
42) 「風景とローカル・カバナンス―春の小川はなぜ失われたのか」鳥越皓之・中村良夫・早稲田大学公共政策研究所編，早稲田大学出版部，2014年